出雲市野尻町：法王寺に残る韓国人の遺骨の韓国返還問題

韓国への返還問題相談会

と　き　：　２０１４年8月３１日（日）１４時３０分～１５時４０分

場　所　：　出雲市野尻町　法王寺

出席者　：　法王寺　２名／ 赤井前住職、赤井現住職（２０１３年：住職就任）

韓国民団島根地方本部：３名　李団長、丘事務局長、

日韓市民友好の会４名：江角、日韓親善協会（木次）

内　容　：

（法王寺から経過など説明：赤井前住職より）

出雲市稗原町（当時は斐川郡稗原村？）には、近くの炭鉱で働く韓国人が住んでいた。

１９５３年2月、稗原町川平地区で熱心に住民の世話役をしている嘉藤ヒデジロウさんが寺に来られ、一人の韓国人が死亡したので地元としてこの葬式に協力するので、法王寺として葬儀に出かけてほしいとの要請があり、先代の住職（赤井前住職の父親：故人）が出席した。そして、葬儀後、この故人の奥さん（金　玉順？さん）が寺に遺骨を持って来られ、「韓国へ帰るので当分の間、この遺骨を預かってほしい」と依頼された。やむを得ず預かったが、その後、この奥さんからはこの６０年以上、何の連絡もなく、この遺骨は長い間、寺の本堂にて保管して来た。この遺骨について韓国の会の江角さんらが、お寺に数回、尋ねて来られ遺骨返還の話があった。当寺としてこの際、この遺骨を韓国の遺族に返還したいと考えている。ぜひ、この返還について協力してほしい」など説明があった。

これについて、韓国民団の李団長から「以前は、韓国人の遺骨返還について、韓国政府はそれほど厳しい取り扱いではなかったが、最近は、遺骨が韓国人である公的な証明を求められるようになって来たので、法王寺のこの遺骨が韓国人のものであることの証明について、ぜひ、努力していただきたい・・・」。

日韓友好の会は「この遺骨が韓国人であることについて、会として稗原など地域における韓国人の炭鉱生活や居住記録、当時の日本人の住民の方々から何らかの証言をいただくよう、心当たりもあるので取り組み、また昭和２８年当時は既に前２７年に旧植民地出身者はサンフランシスコ条約締結で戦争講和を行った後、日本政府から日本国籍を一方的に剥奪されたが、出雲市役所等で戸籍調査等など努力していきたい。ぜひ、お寺としても、この遺骨に対する経過や取扱いについて韓国政府に対して証明していただきたい。一方、この故金さんの　出身地などを示す資料はないので、故人の特定や韓国の遺族を探し出すことは非常に厳しいものと考えるが、今後、韓国民団の皆様にご協力ご支援をお願いする」。

こうしたやりとり後、お寺に残る韓国人の遺骨が入る「遺骨箱」が参加者に公開された。この箱には、表紙に「　**昭和廿八年二月三日　　寒光　照道信士　位**　」

裏紙には「　**俗名　　金且福[redacted]享　　行年　四十三才**　」　と記されている。

今　後　：

それぞれが韓国人の遺骨であることの証明に向けた取り組みや韓国への返還に伴う問題などを整理するなどの取り組みを行い、一定期間後、また連絡しあうことなどを確認した。

（文責　　江角）

2014年 9月19日 島根日日新聞
(1) 第7728号 日刊／但し新聞休館日は休み (1986年3月22日第三種郵便物認可)

ここにも整理されない戦後がある

出雲市野尻町の遺骨

市民団体、返還を模索

出雲市野尻町の法王寺に、61年前から預けられたままになっている遺骨がある。遺骨は、戦中にこの地域にあった炭鉱で働き、1953年に43歳で亡くなった韓国人金且福さんと見られている。出身地の韓国への返還を模索する松江の市民団体「日本韓国の市民友好を考える会」（江角秀人代表）は「ここにも整理されてない戦後の姿がある」と話した。

出雲市野尻町法王寺に保管されている遺骨＝書付の裏には俗名金且福さん行年43歳と書かれている

野尻町には、雲南市三刀屋町にかけて広がる島根炭田と呼ばれる石炭層があり、太平洋戦争後もしばらくは、規模の大きな旧島根報国炭鉱と、小規模で地元の人たちが作業に従事した旧出雲炭鉱が採炭を行っていた。三刀屋町誌などによると、旧島根報国炭鉱は高瀬炭鉱として1889（明治22）年に採掘が始まり、大正時代中ごろに休止となるが、太平洋戦争が始まると石炭需要が急増し再開された。最盛期のこのころの生産量は、日産120トン。そのため、設備の拡充や労働者の増員が図られ、九州四国地方から炭鉱労働者が集まり最盛期の労働者200人の内、韓国人も30人ほどいたという。

関係者の話を総合すると、同寺に61年もの間、遺骨が保管されてきた経緯は、1953年2月に野尻町に隣接する同市稗原町川平地区で熱心に住民の世話をしていた嘉藤秀次郎さんが、同寺を訪れ、現住職の先々代にあたる赤井泰隆住職に「1人の韓国人が死んだ。地元として葬式に協力するので葬式に出かけて欲しい」と要請したことから。葬儀後、故人の妻が寺に遺骨を持って訪れ「韓国に帰るので当分の間預かって欲しい」と依頼した。

一方、同会は炭鉱跡の発掘や当時を知る人からの証言からこの遺骨の存在を知り、今年8月31日には、在日本大韓民国民団島根地方本部職員を伴い、同寺に返還の相談に訪れており、その際に課題として挙げられたのは、遺骨の主が韓国人である事の証明だった。

江角代表は「戦争当時日本で働いてきた韓国人は、サンフランシスコ条約で一方的に日本国籍を奪われた。それでもどこかに記録が残っているはず、行政の力も借りて故郷に帰してあげたい。ここに何故韓国人の遺骨があるかや返還活動を多くの人が知る事が、戦後整理につながる」と話す。

一方の法王寺先代住職の赤井泰賢さん（86）は「葬式後、必ず迎えに来ますと奥さんが言われたのを覚えている。仏の気持ちとしては、帰りたいとは思うが、何処へ帰るというのか、無縁墓地へと送るのではしのびない」と、遺族の発見が先に必要との考えを語った。

本堂に保管されてきた遺骨は、白木の箱に納められ、表には昭和28年2月3日「寒光照道進士」位、裏には俗名「金且福」事・行年43歳と、先々代住職の手で書かれた書付が張られている。